

## Gunkel の関係論的アプローチにおける普遍性批判 ——内的アプローチから再考する

名古屋大学 王淳熙

本稿は、道徳的地位の基準に関する議論において、David J. Gunkel の関係論的アプローチを中心に上げ、その理論的意義および限界を分析することを通じて、内的アプローチの再評価の必要性を論じることを目的とする。Gunkel は自身の研究において、従来の内的アプローチに基づく道徳観を批判し、道徳的配慮の基準を個体の意識や感受性などの内的特性に求めることの限界を指摘した。彼は倫理的責任が他者との関係性に依存し、関係性に基づく倫理的応答 (ethical responsibility) が道徳判断の根拠となると論じている。この立場は、従来の内的アプローチに対する革新的な視点を提供し、特に AI やロボット倫理の議論において重要な理論的示唆を与えている。さらに、2023 年刊行の *Deconstruction* において、Gunkel は「非全体化的普遍性 (weak universality, non-totalizing universality)」および「脱構築的倫理 (aporetic ethics / deconstructive ethics)」という概念を導入している。これは、倫理には一定の普遍性 (例えば、「動物への残虐行為や破壊的な扱いを倫理的に制限すべき」という一般的な原則) が必要である一方で、それを唯一の絶対的な基準として他者を包含・排除すべきではないという立場である。彼によると、道徳的地位に関する検討において、我々は全の対象に一律の判断基準を適用するのではなく、非人間動物や障害者、AI ロボットといった異なる存在ごとに、その関係性や特性の違いに応じて柔軟に検討すべきなのである。それゆえ倫理は常に「未完成で開かれたもの (aporetic)」として維持されるべきだと、Gunkel はこう主張している。

こうした Gunkel の関係論にはいくつかの利点がある。まず、従来の道徳論が内的アプローチに偏重しがちであるのに対して、他者との関係性および我々から他者への倫理的応答 (response) を重視する点は、AI 倫理やロボット倫理における実践的議論に新たな視座を提供している。また、Coeckelbergh や Pittella らの研究者は、Gunkel のアプローチが倫理的思考の枠組みを広げ、技術的对象への道徳的配慮を考察する上で有効であると指摘している。

一方で、関係論には批判も存在する。先行研究 (Coeckelbergh, 2018; Nyholm, 2020; Smids, 2022) では、関係論的アプローチは規範における明確性に欠け、責任の帰属が拡散するため、実際の倫理ガイドラインや政策への適用が困難になると指摘されている。さらに、Gunkel 自身が 2023 年に導入した「非全体化的普遍性」という概念は、一見すると、関係論的アプローチに対する「すべての他者に対して無条件に倫理的応答しなければならない」という批判を回避するための柔軟な枠組みのように見える。しかしながら、倫理的判断においては何らかの共通原則、すなわち普遍性を前提とせざるを得ず、この「弱い普遍性」もまた一定の基準を他者に押し付ける可能性を残している。したがって、むしろ判断基準が曖昧になり、普遍性の問題を根本的に解決しているとは言い難い。

以上を踏まえ、本稿では Gunkel の関係論的アプローチの長所と限界を整理し、内的アプローチの再評価を試みる。特に、感受性や意識といった内的特性に基づく倫理的考慮は、AI 倫理の実践において依然として不可欠であり、より安定的な道徳判断の枠組みを構築できると考えられる。本稿は、Gunkel の関係論的アプローチの理論的貢献を認めつつも、AI 倫理における規範的実用性の観点から内的アプローチを擁護するものである。